2009.4.1　第17号

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉特定非営利活動法人　古　川　学　人

新史料発見
『服部英太郎筆記　吉野作造講義ノート』

吉野作造記念館　館長　田中昌亮

このほど、東北大学名誉教授服部英太郎が、東京帝国大学在学中聴講した吉野の講義ノートが当館に寄贈された。このノートは、服部英太郎の子息東北大学名誉教授故服部文男氏が仙台の自宅に保管していたもので、文男氏の門弟で、同大学経済学部教授大村泉氏が遺品整理中に発見した史料である。

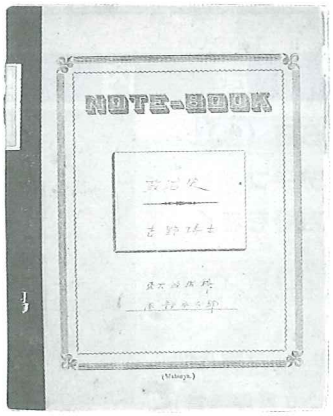
服部英太郎（一八九九～一九六五）は、和歌山県に生まれ、東京帝国大学法学部政治学科に入学、在学中は、学生の思想団体「新人会」に参加した。卒業後は、東北帝国大学に勤務、「社会運動史」「社会政策論」などの講義を担当した。一九四二年（昭和一七）、学説のため、文部省の要求により退職を余儀なくされたものの、戦後復職、社会政策学の権威として多くの功績を遺した。また、東北大学経済学部長、福島大学長を歴任した。

服　部　英太郎
（『宮城県百科事典』より転載、河北新報社提供）

この史料は、服部英太郎が、東京帝国大学法学部政治学科一年の時、一九二〇年（大正九）九月～一九二一年（大正一〇）一月までの吉野の講義「政治史」を書き取ったノートで、「一九世紀以後今日に至るまでの政治史」「近代欧州の情勢」「現代国家の出現」「英国に於ける憲政の発達」「仏国の議会の発達」「欧州強調とウィーン会議」の六章から成っている。

当館では、赤松克麿筆記の吉野作造講義ノート五冊（一九一五～一六年）を所蔵している。また、他にも全国で吉野の門弟が筆記した講義ノートの存在が明らかとなっている。しかし、当史料は、地元宮城県で発見された講義ノートとしては初めてのものであり、さらに、同じ年のノートが発見されていないことから、吉野の考えが、どのように講義に反映されていたのかを読み取るうえで、大変貴重な史料である。

今後、当館として、ノートの解読を進めながら、展示などで公開したいと思っている。



服部英太郎 記
吉野作造講義ノート

コラム

NPO法人 古川学人
理事長
佐々木　源一郎

多様化する社会、慢性的な不景気、社会全体の閉塞感、政治への不信等。

今や、日本の社会、経済システムが大きく揺らいでいる。

近年の知識社会の到来は、価値観の多様化と多様な組織が求められ、又知識ワーカーの流動化は新たなコミュニティを望んでいる。

これらの要望に応える組織として公的機関よりNPOが求められている。

古川学人はNPO法人で、一般的にNPOの役割及び機能は市民生活の質の向上を目指し、市民が社会の構成員たることを意識し、醸成することにある。

そのため、理想として自らの「使命」に基づき自発的に自立した運営が大事である。現実には市民の間にNPOという言葉は、大分認識されてきたが、関心については未だ高まってはいない。

私達の自主的な事業の遂行と組織の運営のための資金は容易ではない。

更に今後の課題として、行政への従属化の危機、悪い営利法人のNPO法人への進出、市場競走の危機、制度改革の危機などある。

「服部英太郎筆記 吉野作造講義ノート」について

吉野作造記念館　館長　田　中　昌　亮

私が服部英太郎教授に「社会政策論」を教わったのは一九五二年（昭和二七）であった。身長は一八〇センチ以上あったと思う。紺の背広をきちんと着こなした偉丈夫であった。

服部教授について、「経済ゼミナー」一九五八年八月号に記述がある。

「（東北帝国大学―引用者注）法文学都の創設直後からの服部英太郎教授は、いわばこの学部の生きた歴史である。暗黒の時代にこそ学説を遂に曲げることなく、ともすれば過激にはしる学生を押える一方、真実の解明には苛責なかったといわれている。風采は温容な老紳士。担当は社会政策論と社会運動史、講義はまことに晦渋で、独文直訳調の漢語ばかりの句読点の少いスタイルで延々とつづき、ノートをとる学生を泣かせる。」

服部英太郎教授が東京帝国大学の学生のとき、一九二〇年吉野の「政治史」の講義をうけた。吉野の「政治史」の講義について、吉野の弟子蝋山政道は次のように話している。

「大正六年先生の欧州政治史の講義を聴いたとき、いままでの近代欧洲史が國別で多く論じられているのに反して、先生の講義内容が前記の如き歴史的形成力を概念的に把握して諸國を横断的に取扱っているのに感服し、これこそ新しい欧洲史であり、やがて世界史である、と思った。」

吉野は、ノートの取り方について、著書「試験成功法」で次のように述べている。

「しからば教師の口述するところを、如何に筆記すれば試験成功術の主意に叶うか、今多くの書生の筆記を見るに、実に乱暴極まるものである。もっとも教師の口述が早くて、すべて書き切れぬから、したがって字も粗末になるという点もあろうけれども、ソレにしても、あんまり乱暴で甚だしきは、後で自分で読んでも、何だか分からないのがある。法科大学などでも、他人が読んで、ともかく分かるようなノートを作る者は、百人に一人と云うている。コンな有様では、後に読むとき骨が折れて堪るものではない。すべてノートは、後に読んで覚えんとするときに、便利になるように、筆記して置かねばならぬ。早く云えば、綺麗にノートを作って置かねばならぬ。」

服部英太郎教授のノートは、「試験成功法」に書いてあるように読みやすく、きれいにとっている。

終わりに服部家の遺族の方々と吉野作造記念館に直接持参して下さった大村泉教授にお礼を申し上げます。

『吉野作造顕彰講座 ―現代に生きる吉野作造―』紹介

吉野作造記念館　館長　田　中　昌　亮

平成二十年十二月～平成二十一年二月

今年も当館館長田中昌亮による『吉野作造顕彰講座』を開催しました。今回は吉野作造生誕百三十年没後七十五年の記念年であり、『現代に生きる吉野作造』をテーマに、六回に分けて講話を行いました。

また、講座の合間には当館職員による賛美歌合唱や、昔懐かしいレコード鑑賞を行いました。

講　座　内　容

第1回　平成20年12月6日（土）

今、蘇る証言！聞きとりテープ
他界した人々の肉声で吉野をきく

第2回　平成20年12月20日（土）

堅田剛論文を読む
秘密出版「西哲夢物語」と吉野作造
（生誕130年記念公募論文最優秀賞）

第3回　平成21年1月17日（土）

吉野作造の葬儀
吉野作造墓　多摩霊園
企画展「現代に生きる吉野作造」見学

第4回　平成21年1月31日（土）

今、脚光を浴びる
明治文化研究会と吉野作造

第5回　平成21年2月7日（土）

賛育会90年　賛育会病院の現在
賛育会ニュース第7号吉野作造追悼号

講師　田中昌亮（当館館長）

講座の様子

第6回　平成21日2月21日（土）

現代に生きる吉野作造
戦後の吉野博士記念会記録をよむ

企画展紹介

吉野作造生誕百三十年　没後七十五年記念企画展
『現代に生きる吉野作造』
二〇〇九年一月十七日～三月二十九日

一九三三年（昭和八）三月十八日、吉野作造は五五歳でこの世を去りました。それから七五年―。今回の企画展「現代に生きる吉野作造」では、吉野作造の死とその後に焦点をあて、吉野の活動を受け継ぐ人びと、東京や故郷古川における吉野の顕彰活動を紹介しました。ここでは、その一部を掲載します。

Ⅰ部　吉野作造の死

一九二四年（大正十三）、肋膜炎を患ってから吉野は体調不良を訴えることが多くなった。一九三三年（昭和八）一月十一日、吉野は自ら決意し賛育会病院に入院した。本人は寒さしのぎ程度にしか考えていなかったが、思いのほか病状は重く、同年三月五日湘南サナトリウムに転院した。しかし、その夜、病院で火事が起こり、厳寒の中、着の身着のままで避難した。このことがたたり、同月十八日午後九時三十分頃、家族や友人に看取られながらその生涯を閉じた。

遺体は亡くなったその夜、東京の自宅に戻り納棺、密葬された。葬儀は三月二一日午後一時から青山学院講堂で行われた。巣鴨組合教会野口末彦牧師（第四代本郷教会牧師）の司会のもと、牧野英一の履歴朗読、海老名弾正、安部磯雄の告別の辞、最後に親族代表として弟吉野信次が挨拶を述べ午後二時ころ終了した。思想団体や政治団体、マスコミ、芸術家、留学生など多くの人々がその死を悼み、参列者は七百名を超えたという。

吉野作造葬儀順序

Ⅱ部　現代に生きる吉野作造

戦後に行われた吉野の顕彰活動の中から、東京で結成された吉野博士記念会と故郷古川での活動の様子を紹介。

●吉野博士記念会

一九五〇年（昭和二五）三月、吉野の弟子河村又介と石川清らによって結成された。宮城県出身者、学生時代の友人、東大の同僚、新人会・東大ＹＭＣＡ・賛育会・社会民衆党・明治文化研究会のメンバーなど、生前の吉野を物語る人びと総勢一六六名が集まった。石川の回想によれば、この会は、先に石川と宮武外骨が計画し次第に同志の賛同を得て発会に至ったという。右の写真は、同年四月十八日に朝日新聞社で行われた創立総会の様子で、立って挨拶している人は吉野の長男俊造氏である。

会では例会を開き、吉野との思い出やエピソードを語り合った。またデモクラシー会館の設置や記念切手作成等の記念事業を計画、実際に荒井陸男画の吉野博士肖像画を東京大学に寄贈する事業が実現した。その後、一九六六年（昭和四一）三月十八日の第十六回例会まで続けられた。

吉野博士記念会設立総会　1950年（昭和25）4月18日

●古川における顕彰活動

古川では、一九五九年（昭和三四）十二月、有志によって吉野の生誕八十年を記念する講演会が開かれ、これを機に一九六二年（昭和三七）十月「吉野先生を記念する会」が結成された。会では、史料収集や記念碑の建立、また旧古川市図書館内に吉野文庫を設置するなどの事業を展開、顕彰活動を進め現在に至る。

左の写真は、昭和三十年代から四十年代にかけ、当時の陸前古川駅舎線路わきに飾られていた吉野肖像画の原画である。実際に飾られていたものは畳二枚分の大きさで、女優大森暁美氏（古川出身）と剣豪千葉周作の肖像とともに立てられていた。吉野は、戦後まもなくから、郷土の偉人として、認識されていった。

古川駅に飾られていた吉野肖像画
（横手広吉 作）

吉野作造生誕一三〇年没後七五年記念『吉野作造研究』論文募集事業

二〇〇八年、吉野作造生誕一三〇年没後七五年を迎え、その記念事業として二〇〇七年三月、「吉野作造の思想ならびに業績」をテーマとした論文募集事業を開始した。太田雅夫氏（元桃山学院大学教育研究所教授、同研究所所長）、祇園寺則夫氏（独立行政法人国立高等専門学校機構小山工業専門高等学校教授）のお二人に審査員を依頼、当館館長田中昌亮と三名で審査に当たることとなった。

二〇〇七年五月から歴史系、法律系、政治系学部・学科をもつ全国の大学および附属の研究所、歴史学会、博物館、図書館等に呼びかけ論文の募集を開始した。論文要約提出の第一次審査には同年十月末までに国内外から十一編の応募があった。第二次審査に進んだ本論文九編を審査した結果、二〇〇八年七月、最優秀賞一編と優秀賞二編が決定し、九月十三日に授賞式を行った。授賞式では、表彰ならびに賞金の授与、堅田剛氏による最優秀賞受賞の記念スピーチが行われた。

なお授賞論文は『吉野作造研究』第五号吉野作造生誕一三〇年没後七五年記念公募論文特集号として発刊した。（下記「刊行物の案内」参照）

〈最優秀賞〉
「吉野作造と鈴木安蔵 ― 五つの「絶筆」をめぐって ―」
堅田剛（獨協大学教授・埼玉県在住）

吉野作造最晩年一九三三年（昭和八）一月から二月の、鈴木安蔵宛三通の書簡に加えて、論文「スタイン、グナイストと伊藤博文」（『改造』二月号）、今中次麿宛書簡（一月十日付）の五つの絶筆を検討し、明治憲法制定史研究の、吉野から鈴木への継承を論じた。

堅田剛氏による受賞記念スピーチ

〈優秀賞〉
「吉野作造に於ける明治文化の世界」
秋山真一（千葉県立成田国際高校教諭　千葉県在住）

豊富な資料紹介の下、吉野作造が懐いた明治文化像を論じた。吉野が庶民階層にとっての近代という視座を常に持ち続けたことや、明治文化に欠如している普遍的精神の導き手としてキリスト教精神の必要性を強調した。

〈優秀賞〉
「吉野作造の原型（アーキタイプ）質 ― 若年期の精神史試論」
西田耕三（ノンフィクションライター　宮城県在住）

吉野作造が青少年期に投稿し発表した文章、特に論者が発掘した「松風録」（宮城県尋常中学校『如欄会雑誌』第一号、一八九五年）や「秀吉を想ふ」（第二高等学校『尚志会雑誌』第三四号、一八九九年）の紹介と分析を行い、吉野の原型質を模索して思考の推移を「精神史」の観点から展開した。

左から祇園寺則夫氏 太田雅夫氏 堅田剛氏 秋山真一氏 田中昌亮
なお、西田耕三氏は残念ながら授賞式当日は欠席されました。

刊行物のご案内

今年度は『吉野作造研究』（これまでの『吉野作造記念館研究紀要』を改題）第４号と第５号を発刊しました。

頒価：各１，０００円

当館で直接お求めいただけるほか、郵送による発送も可能です。詳細は当館にお問い合わせ下さい。

『吉野作造研究』第４号
- 鈴木義男と吉野作造　― 一つの覚書 ―　（仁昌寺正一）
- 吉野作造と『六号雑誌』　（和泉敬子）
- 吉野作造博士と賛育会　（橋本章）
- 田澤晴子『吉野作造』・松本三之介『吉野作造』を読む　（祇園寺則夫）
- 佐々木平太郎日記と佐々木平太郎宛書簡　（田中昌亮）
- ２００６年度入館者・物品販売・会場使用料・事業活動報告
- ２００６年度企画展紹介、新着図書・史資料紹介

『吉野作造研究』第５号
吉野作造生誕１３０年没後７５年記念公募論文特集号
- 序　（田中昌亮）
- 講評　（太田雅夫）
- 〈最優秀賞受賞論文〉
  - 吉野作造と鈴木安蔵 ― 五つの「絶筆」をめぐって ―　（堅田剛）
- 〈優秀賞受賞論文〉
  - 吉野作造に於ける明治文化の世界　（秋山真一）
  - 吉野作造の原型（アーキタイプ）質 ― 若年期の精神史試論　（西田耕三）

古川高校来館　感想文紹介

平成二十一年三月十二日、十三日、十九日に古川高校一学年の来館をいただきました。田中昌亮館長からの講話をはじめ、ビデオ上映・常設展示・企画展「現代に生きる吉野作造」の内容で見学をしていただきました。その感想文を紹介します。

古川高校一年
鈴木　文平

ぼくは吉野作造のことなんて、何も知らなかった。ただ、民本主義を唱えた人物と思っていた。彼はなぜ、有名なのだろうと考えることはあったが、それを調べようと思うことは、今まで一度もなかった。そのため、今回の見学は貴重なものとなった。ぼくは色々と感じさせられた。現在では民主主義が当然のようなものだが、彼の時代は違っていたようだ。ぼくはそんな時代に生まれなくて良かったと思った。彼が凄い人間だと思ったのは、彼の生活の様子を知った時だった。彼は勉強ばかりしていた。当時はゲームがなかったというのもあるが、ぼくには絶対にできない。彼は強い精神と志を持っていたのだろうな。

そして、彼の勇気には、関心させられた。当時の日本の社会は、天皇に権力があり、国民の権利は制限されていた。そのような中で、もし国民の権利を重視するよう唱えたなら、一体どうなるだろうか。国家を敵にしてしまうようなものだ。殺されてしまうかもしれない。それでも民本主義を目指した彼は、やはり偉大な人間なのだ。自分を犠牲にしてまで国民の幸せを手に入れようと、闘い続けた。まさに天才だ。ぼくが、現在の民主主義社会の中で、幸せに生活できているのも、彼のおかげだと思う。ありがとうと言いたいものだ。ぼくも彼のように、何か凄いことをしてみたい。でも、それはできない。それなら、どんな小さなことでもいいから、誰かを助けるようなことをしたい。それはできるはずだ。もし、ぼくが本当にそう思っているならば、ぼくも彼のような強い精神と志を持つべきだと思う。そうすれば、もっと自分を変えることができると思う。作造記念館に行って学んだのは、彼の歴史だけではない。人間性や努力の大切さ、そして愛情。たくさんのことを学ぶことができた。今度は、それを自分の生活にいかしていく。

古川高校一年
斎藤　ちはる

吉野作造のことは、教科書にのっていてそして古川出身ということは知っていましたが記念館を見学したのは初めてでした。特に印象に残ったことは吉野作造の生涯についてです。吉野作造が信じていた宗教はキリスト教でとても熱心に信仰していたことに驚きました。また、中国やヨーロッパへ行き数年の間留学していたことにも驚きました。民本主義を主張し大正デモクラシーの代表の人だったということは授業でわかっていたのですが、周囲からの強い圧力を受けてまで主張したことは知りませんでした。大正時代の強い権力を持った人達は外国の植民地化や戦争など人々を苦しめることをしてきました。しかし、吉野作造はこの行為を反対し民本主義を主張したということに、私はとても感動しました。勇気をもって国民全体の幸福のために強い権力をもった人々と戦うことは私には絶対できないことです。ただ人の言うことに受け流されない強い意志をもった人だったということがわかりました。

私が生まれた古川は、とても有名な人が生まれた場所であることに今でもすごいなぁと思っています。吉野作造のような周囲の意見に流されず強い意志をもち、そして国民全体の幸福を考えるという人を思う気持ちを手本にして、何事にも頑張っていこうと思います。

古川高校一年
三塚　恵理子

私は、これまでは吉野作造という人物に興味を持ったことがありませんでした。そして歴史の教科書などで名前は知っていても、具体的に何を唱えたのか、どのような事をしたのか知りませんでした。だから今回、吉野作造記念館を見学して、その生涯を知り、「民本主義」という考えに触れて吉野作造をわずかながらも理解できたように思いました。

大正の時代で民本主義を唱え続けるのはとても困難なことだったと思います。しかし、最後まで信念を曲げず、真っ直ぐに進み続けた吉野は本当に偉大だなぁと思いました。それだけでなく、ヨーロッパに渡って実際に現地のデモなどを見たり、大学や研究所に留まらず外へ足を運んだ、という話を聞いて、吉野の行動力を強く感じました。そういった信念の強さや行動があったからこそ、「民主主義」の考えの下で様々な活動ができたのだと思いました。

今回の校外学習で、私は以前より深く吉野作造が偉大なことをやってきたのだと知ることができて、本当に貴重な学習をすることができたと思います。

これまでのイベント紹介
2008年4月～2009年3月

サマーイベント
2008年8月2日

恒例のサマーイベントは、多くの親子連れで賑わいました。

職員手作りの人形劇は、「おおかみと七ひきの子やぎ」など3作品を上演。ワイルドフラワーを使ったワークショップや、色画用紙とクレヨンを使っての七夕飾り作りも人気を集めました。

吉野の活躍を分かりやすく紹介した写真展からはクイズを出題。全問正解者にはメダルがプレゼントされました。

古川ロータリークラブ 創立50周年事業
藤城清治版画展
2008年4月26日～5月25日

当館と古川ロータリークラブの主催により「藤城清治版画展光と影のシンフォニー」を開催し、藤城氏の貴重な原画八点をはじめ、版画、ライトアップアートなど約六〇点が展示され、来館者の心を魅了しました。

五月一八日には藤城氏が来館し、トークショーとサイン会が行われました。

第2回 吉野ネットワーク交流事業「次世代人材育成研修会」
2008年8月26日～28日

吉野ネットワーク交流事業は、読売・吉野作造賞受賞者を中心に、行っている事業です。学生を対象に合宿研修会を開催しています。講義やディスカッションを通して、情報交換しながら視野・見識を広げ次世代の吉野作造を育成することを目的として行っております。

研修会では、講師に、猪木武徳氏、苅部直氏、清水唯一朗氏、昆野伸幸氏、奈良岡聰智氏、大川真氏の参加を頂き、八月二六日～二八日の三日間の合宿研修（セッション及びディスカッション）を左記の通り実施しました。

- 第一セッション
  「福沢諭吉と吉野作造」
  講師：苅部　直氏
- 第二セッション
  「福沢諭吉の思想」
  講師：猪木武徳氏
- 第三セッション
  「全体ディスカッション」
- 第四セッション
  「成果報告会」一般公開

読売・吉野作造賞受賞者講演会
飯尾　潤 氏講演会
2008年10月18日

二〇〇八年度読売・吉野作造賞受賞者は、政策研究大学院大学教授飯尾潤氏で、受賞著書は『日本の統治構造―官僚内閣制から議院内閣制へ』です。

今回は「政治改革と日本政治の可能性」をテーマに、（一）民主化と戦後日本政治、（二）政治改革の始動と政界再編と行政改革、（三）改革の折り返し点としての小泉内閣、（四）最近の政治と政権選択選挙、（五）政党間競争の将来、（六）日本政治の可能性等の内容を聴講者に分かり易く講演をしていただきました。

講演終了後、著者のサイン入り受賞作を限定販売しました。

中学生招館事業
2008年10月3日

大崎市内の中学生を対象に吉野作造をより知ってもらおうと、昨年から始められた事業で、一〇月には三本木中学校二年生六七名が来館しました。

生徒たちはスライドを使った吉野の説明や、生涯を綴った映画を興味深い様子で観たあと、担当の先生が作成した資料をもとに、常設展示室をウォークラリー形式で見学しました。

永田英明氏 特別講演会
2008年11月8日

東北大学学術資源研究公開センター史料館助教永田英明氏を招き、特別講演会を催しました。

『旧制二高時代にみる吉野作造とその周辺―「忠愛之友倶楽部」を中心に』をテーマに、東北大学史料館所蔵の資料から、吉野の学生生活、キリスト教とのかかわりや人間関係をスクリーンに映しながらわかりやすく講演していただきました。

講演・講座依頼内容

年	月	日	主催者	講師	解説内容	会場
20	6	17	社団法人おおさき青年会議所	館長 田中　昌亮	『人』この地に生きる「吉野作造生誕130年 ～地域に残した大きな功績」	古川商工会議所
20	7	3	宮城県誠真短期大学	館長 田中　昌亮	生誕130年「現代に生きる吉野作造」	吉野作造記念館
20	7	15	宮城いきいき学園　大崎校	館長 田中　昌亮	郷土の歴史と文化	パレットおおさき
20	8	20	宮城いきいき学園　石巻校	館長 田中　昌亮	生誕130年「現代に生きる吉野作造」	東松島市コミュニティセンター
20	10	15	西多賀寿大学	館長 田中　昌亮	「灯ともる　昼の廊下を行きつきて 吉野作造先生　この部屋にいましき」	仙台市西多賀市民センター
21	1	9	大崎市小中学校校長会	館長 田中　昌亮	生誕130年「現代に生きる吉野作造」	吉野作造記念館

二〇〇八年三月～二〇〇九年二月

寄贈資料一覧

（順不同　敬称略）

多くの方のご厚意を得て貴重な資料をご寄贈いただいております。
厚く御礼申し上げます。

〈資料名〉	〈寄贈者〉
『ボローニャ紀行』　他一点	井上ひさし
『東北大学百年史』第一巻「通史一」　他一点	東北大学
『暗黒日記　一』　他十四点	佐々木一郎
『吉野作造の朝鮮認識に関する研究―提携の思想に焦点をあてて―』	田中義明
「小山東助生誕一三〇年プレイベント」資料　他五点	西田耕三
『雲の柱』第二二号	賀川豊彦記念松沢資料館
『近代日本研究』第二四巻　他二点	慶応義塾福澤研究センター
『宮武外骨絵葉書コレクション』	菅野又雄
『歴史地理教育』第七二九号	歴史教育者協議会
『東北学院資料室』第七号	仁昌寺正一
『大学史紀要』第十二号　「明治大学人権派弁護士研究―　布施辰治研究」	明治大学史資料センター
『自由民権』第二一号　他一点	町田市立自由民権資料館
『吉野作造と中国』	尾崎護
『藤城清治　影絵の世界展』	アート・プリント・ジャパン
『これならわかる東北の歴史Q&A』	大月書店編集部
『仙臺文化』第七号	『仙臺文化』編集室
『甘粕正彦　乱心の曠野』	新潮社
「吉野作造先生生誕八十年記念講演会」パンフレット　他八点	永澤汪恭
『歌人　阿部静枝とその精神性―短歌作品に見る近代性について―』	菅原千代
『CPAS　ニュースレター』第九巻第一号	伏見岳人
『東北大学史料館だより』第九号	東北大学史料館
『同志社の青春』	太田雅夫
『明治文化研究会と明治憲法　宮武外骨・尾佐竹猛・吉野作造』	堅田剛
『歴史は生きている　東アジアの近現代がわかる十のテーマ』	朝日新聞出版
『国家学会雑誌』第百二十巻第九・十号	吉野作造講義録研究会
『防災の科学』	後藤一蔵
『the　座』第五一号〔改訂版〕	こま つ座
『みやぎ聞き書き村草子』第七集　他一点	境数樹
『古川市史』第一巻「通史一」	大崎市教育委員会
『社会教材　デイリーサピックス　五年生』	ジーニアスエデュケーション
『社会文化形成』第二号	田澤晴子
『仙台市史　通史編』第一巻　他四三点	仙台市
服部英太郎筆記「吉野作造講義ノート」	大村泉

利用案内

開館時間

午前９時～午後５時まで（入館は４時３０分まで）

入館料

一　般　３１０円　　高校生　２１０円

小中学生　１００円

（団体２０名以上、割引有）

休館日

月曜日（但し祝日・振替休日に当たる場合は翌日）

年末・年始（１２月２９日～１月３日）

バックナンバー

「吉野作造記念館だより」

1号～16号

ご希望の方は記念館まで。

（※一部コピーで対応しております。ご了承下さい。）

吉野作造記念館
〒989-6105　宮城県大崎市古川福沼1丁目2番3号
TEL　0229－23－7100
FAX　0229－23－4979
E-mail　yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp
URL　http://yoshinosakuzou.jp/